別記様式第４号

平成 30 年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成 31 年 3 月 29 日

報　告　者	学科名	栄養学科	職 名	准教授	氏 名	平　松　智　子
研 究 課 題	外来糖尿病患者の健康状態（心身における）と食生活との関連					

研 究 組 織		氏　　名	所 属 ・ 職	専 門 分 野	役　割　分　担
	代表	平松智子	保健福祉学部・准教授	臨床栄養学	総括、測定指導等
	分担者	廣澤裕代	パーク統合クリニック・副院長	糖尿病内科	患者へのインフォームドコンセント、採血等
		中西修平	川崎医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科・准教授	糖尿病内科	研究の相談・統計処理等
		富岡加代子	パーク統合クリニック・管理栄養士	臨床栄養学	身体測定・栄養指導等

研究実績の概要

【目的】

近年我が国では、糖尿病が強く疑われる者の割合は高齢になるほど高く、今後糖尿病患者はさらに増加することが予測される。糖尿病は様々な合併症を併発する疾病である。また、筋力低下をきたすサルコペニアの要因としても考えられている。糖尿病の治療において最も基本となるのは食事療法である。これまでに総合病院や市中病院での糖尿病患者における食事摂取状況や体組成の実態調査はいくつか報告されている。しかし、クリニックの外来患者を対象とした調査の報告はほとんど見当たらない。そこで、本研究ではクリニックにおける外来患者の栄養アセスメントの実態を把握することを目的とする。市中病院との栄養食事調査結果の比較検討を行う。

【対象・方法】

総社市内のクリニックに通院中の患者 28 名（男性 13 名、女性 15 名）を対象とし、平均年齢は、男性 67.0±9.8 歳、女性 64.5±11.5 歳であった。

調査期間は平成 30 年 5 月 17 日から平成 30 年 10 月 16 日である。カルテより背景因子と血液検査データの抽出を行い、栄養素等摂取状況を聞き取りにより把握した。握力測定と生体インピーダンス方式体組成計を用いて上下肢骨格筋量測定を行い、skeletal muscle mass index（SMI）を算出した。糖尿病群と非糖尿病群の 2 群で栄養素等摂取量・食品群別摂取量、体組成データを比較検討した。

※ 次ページに続く

研究実績の概要	【結果・考察】 　糖尿病群の栄養素摂取状況では、脂質、飽和脂肪酸、カルシウムの摂取量が有意に低値であった。これらは摂取食品群の動向と関連していると考えられる。糖尿病群は魚介類や豆類の摂取量が多く、たんぱく質の摂取源は肉類や卵類よりも魚介類や豆類を摂取していることが推測される。したがって、糖尿病患者は脂質の質や量を意識して摂取していることが考えられる。糖尿病群で乳類の摂取量が低い傾向にあり、これは脂質やカルシウムの摂取量低値をもたらしているのではないかと考える。カルシウム摂取量の減少は、骨折やサルコペニア発症の要因となりうる。また、糖尿病群では、菓子類の摂取量が有意に低値であった。これは、糖尿病患者の菓子や砂糖の過剰摂取は好ましくないという認識の結果であると考えられる。体組成の測定結果は男女とも骨格筋量、SMI、握力、体脂肪量に有意な差はみられなかった。 【結論】 　クリニックにおける外来糖尿病患者では、非糖尿病患者に比べ、脂質やカルシウムの摂取量が少なく、たんぱく質源は魚介類や大豆製品であった。市中病院での調査結果と類似しており、クリニックにおいても栄養アセスメントを実施することの重要性が認識できた。